

桐が谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第 7 2 号

2 0 2 5 年 1 2 月 1 日

発行 中部学院大学 宗教委員会
中部学院大学短期大学部

〒501-3993
岐阜県関市桐ヶ丘二丁目1番地 TEL (0575) 24-2211

クリスマスは人生の光

片桐 多恵子 (岐阜済美学院 学院長)



今年も大学のキャンパスのクリスマス・ツリーに明かりが灯る時を迎えました。世界中の人々が老若男女を問わずクリスマスをお祝いします。その基はイエス・キリストが、この世に誕生されたことから始まってい

ます。

キリスト教を標榜する本学では、神様が私たちのために主イエス・キリストをこの世に送って下さったことに感謝して、各教育機関でクリスマスをお祝いします。中部学院大学・短期大学では、毎年、関キャンパスのグレースホールでクリスマス礼拝をした後で、教職員も学生も食事を共にしながら、ご降誕(お誕生日)をお祝いします。

大学・短期大学・高等学校だけでなく、本学院に連なる附属幼稚園においても、12月には幼い園児達が生誕劇を演じます。園児のひとり一人が自分の台詞を覚え、マリア様やヨセフ様、羊や羊飼いに扮して心を込めて自分の役を精一杯頑張って舞台上で演じます。園児全員で賛美歌を合唱してイエス様の誕生を祝う姿は何よりもクリスマスに相応しい光景です。幼い子供たちによるクリスマスを祝う光景は、神様が汚れのない幼いイエス様の誕生を通して私たちに「人間としての真の生き方」を示しておられるのだと思います。舞台上イエス様の生誕劇を演じた幼児たちには、忘れられない嬉しい貴重な人生の思い出として彼らの心に刻まれます。その証拠に、こんな逸話を中年の男

性から聞いたことがあります。会社の社員旅行のバスの車中のことです。車中が盛り上がり楽しくなってきた時、中年の社員の一人が「♪トントントン!宿屋さん、どうか一晩、泊めて下さい♪・・・」と歌い始めました。生誕劇の場面の一つです。それを耳にした本学院の卒園児達だけでなく、他の幼稚園出身の方々も楽しく歌に加わられてバスの中は大いに盛り上がったそうです。幼い頃に経験した楽しい思い出、特にお友達と共に味わった貴重な経験は、大人になってからも心地よい思い出として心に刻まれて、その人の人生を豊かにします。人間にとって幼児期は一人一人の心身の「苗床」を作る大切な時期で、その時期の思い出が成人してから豊かな心の糧になっていることを如実に物語っている逸話です。

人生には色々なことがあります。嬉しいこと、楽しいことばかりではありません。自分にとって思いがけないことも起こります。起こった時には戸惑ったり、怒りを覚えたり、悲しかったりします。しかし、どんなことも意味があって起こることなのです。どんな意味があるのか、起こった時には分からなくても、いつか分かる時が来ます。「あのことがあったから、現在の自分に成長することが出来た!」と感謝する時が来ます。それを楽しみに今を大事に有意義に過ごしましょう。

クリスマスは今や国を越え宗教の枠を超えて、全世界で現代文化の表象の一つとなっていますが、私たちは何よりもイエス様の誕生に心から感謝し、お祝いしたいと思います。

暗い夜の小さな光

川上 侑 (日本基督教団 各務原教会 牧師)

ろうそくの灯りを思い浮かべてください。火や炎のゆらめきには人の心に安らぎを与える「1/f ゆらぎ」と呼ばれるパターンがあります。炎のゆらめきは、大気の状態や流れ、燃焼している部分や芯の形状や材質によって幾重にも変化していきます。細かな要素によって決定されるので、非常に不安定でランダムなパターンがそこに現れます。決して単調ではない、変化し続ける不安定さ。そのようなゆらぎのパターンが「1/f ゆらぎ」と定義されます。実は炎のゆらめきのみならず、他にも自然界をはじめ「1/f ゆらぎ」のパターンは多く見ることができます。例えば、雨の降るリズムであったり、川のせせらぎであったり。私たちの体のあらゆる部位や運動においても「1/f ゆらぎ」はあります。心拍数や血流、神経をつたわるパルス信号にいたるまで、私たちの体のリズムも「1/f ゆらぎ」で構成されているといえます。ですので、私たちは炎のゆらめき、波の音、木々の葉っぱのざわめきなどの自然界にある「1/f ゆらぎ」に心地よさを覚え、どこか癒しや安らぎを感じるのです。

一方で、このろうそくの灯りは、光源としては頼りないものです。空間の隅々まで明るく照らすには心もとない光です。しかし、イエス・キリストはまさにこのろうそくの灯りのような、小さな、弱々しい光としてこの世に生まれた、と聖書は伝えています。

救い主、メシア、ユダヤ人の王、神の御子。天使はそう呼ばれる者が現れることを告げます。しかし、そう告げられた羊飼いたちが見に行ってみ

ると、そこにいたのは貧しい馬小屋の粗末な飼葉桶の中に眠る小さな赤ん坊でした。権威ある王さまがいたわけでも、威厳のある御使いがいたわけでもありません。神の独り子は、弱さの中に、貧しさの中に、小ささの中に生まれました。天使のお告げがなければ見向きもされなかったであろう、取るに足らない存在。ひとりでは何もできないどころか、親や周囲の手助けがなければその命の存続さえ危ぶまれるような存在。吹けば飛ぶような、か弱く不安定な存在。救い主の誕生はそのようなイエスの姿で描かれます。なんたってイエスはそのような弱さと貧しさの中に生まれたのか。それは当時の社会の中で同じように弱さと貧しさの中に置かれていた人々にこそ、神の恵みは十分に注がれることを示すためでした。

イエスは小さな幼子の姿でこの世にあらわれます。それは弱く貧しい光です。全人類に救いを告げ知らせるにはあまりにも非力な光です。しかしそれは弱き者とその弱さを同じくする光です。暖かく、やわらかく、癒しと安らぎを与えてくれる確かな光。人々の暗い気持ちや弱い心にそっと寄り添ってくれるような光です。それは暗闇の中でもがき苦しむ者たちのためであり、暗闇の中で寂しさに震える者たちのためであり、そして紛れもなく、私と、あなたのために、御子はお生まれになったのです。この小さな光が、わたしたちの心をじんわりと温め、安らぎを豊かに与えてくれること、そしてそのような安らぎが世界中の苦しむ人々や悲しむ人々の心にまで広がり届くことを心より祈ります。

クリスマスのささやかな贈り物

後藤 健太 (スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科 准教授)

クリスマスになるといつも思い出す光景がいくつかある。私がアメリカで7年間暮らしていた頃のことで。

私は、2000年から2007年までの間、アメリ

カ・インディアナ州にあるインディアナ大学ブルーミントン校でAdapted Physical Education (障がい児体育)を専攻する大学院生だった。ブルーミントンはインディアナ州の中では比較的大きな

町で、大学の規模も広大なためダウントウンはいつも大学生で賑わっていたが、ひとたびオフ・キャンパス（大学敷地外）に出れば、アメリカ中西部特有の広大な自然が広がり、地元の人々がのどかな生活を営むありふれた田舎町であった。

折りしも、渡米した翌年に 9.11（アメリカ同時多発テロ事件）が勃発し、その後アフガニスタン戦争、イラク戦争へと、アメリカが戦争に突き進んでいくさなかでもあった。当時の私は 20 代後半から 30 代という年齢で、戦争を始める国というのは市民もメディアもこんなふうにごんごん変質していってしまうものなのかと、不安と憤りをもって過ごしていた。

貧乏大学院生であった私は、たまに友人達とダウントウンで食事をしたりスポーツに興じたりすることはあれど、授業が終われば夜中まで図書館で勉強し、真っ暗な夜道を一人アパートに帰る日々を延々と繰り返していた。そんな暮らしだったため、アメリカのお祝い事などは特に気にも留めずにいたのだが、人間というのは不安に苛まれる生き物である。特に冬は気持ちが沈みやすいものだ。ましてやインディアナ州は日本の東北北部と同じくらいの緯度に位置するので、冬は大変冷え込む。勉学に励みながらも将来が見通せない私は、寒空の中で真っ暗な夜道を歩きながら、不安に押し潰されそうになることもよくあった。

そんな私の気持ちを温かくしてくれたのが、クリスマス・イルミネーションだった。サンクスギ

ビング・デイが終わり 12 月に入ると、町の様々な場所や住宅街はイルミネーションで輝き出す。特に、各家庭の庭を彩るイルミネーションを観るのは本当に楽しい。冬の静けさを照らすその様は、いつも私に温かな勇気をくれた。

渡米 5 年目のクリスマスの日、アメリカ人の知り合い家族が私を昼食に招待してくれた。発達障害のある 5 歳の息子さんをもつ家族で、私がコーディネーターを任されていた障がい児運動教室で知り合い、友好を深めていた。クリスマスの時期にアメリカ人家族の自宅を訪れることは初めてだったが、そのときの衝撃は今も忘れない。リビングに入ったとたん目の前に飛び込んできたのは、3 m はあろうかという本物のもみの木のクリスマスツリーだった。色とりどりのオーナメントが飾られたそれは、あまりにも堂々とし、荘厳で、それでいてとても優しく感じられた。そして、初めてお会いする家族もいる中、皆とても私に親切に接してくれて、戦争中のアメリカに対する私の荒んだ心を一時でも解きほぐしてくれた。（ランチでいただいた定番の七面鳥&クランベリーソースも癒しに一役買っていたのは言うまでもない）

クリスマスは本来、家族で過ごす尊い時間…。家族と離れて遠い地で暗中模索していた私にとって、一つひとつの温かい瞬間がまさにクリスマスプレゼントだった。今でも 12 月になるとあの頃の記憶が蘇り、とても懐かしく落ち着いた気持ちになる。

「2025 年度中部学院大学・中部学院大学短期大学部 クリスマス献金」

Pray for the World!!

今年も主イエス・キリストのご降誕をお祝いするクリスマスの季節がやってきました。

クリスマスは、主イエス・キリストがご自身のすべてを人々の幸せのために捧げつくしたことから、私たち自身の一部を少しでも人々の幸せのために捧げ合うことを実践する季節です。

今年の献金も、国内外の災害被災地及び活動団体への支援を継続して覚えたいと思います。皆さん、温かな思いをもってご献金ください。よろしくお願いいたします。

なお、昨年は 159,331 円の温かい献金をいただき、19 の施設・団体、活動に献金いたしましたことをご報告いたします。

募集期間 2025 年 11 月 27 日(木)～12 月 25 日(木)

献金予定先： 大災害の被災地のために [能登半島地震、ミャンマー地震などの災害被災地]
地域の諸活動のために [野宿生活支援の会・岐阜、岐阜いのちの電話、キリストへの時間、愛知老人コミュニティセンター、あゆみの家、新隣館他]
世界の諸活動のために [ミンダナオ子ども図書館（フィリピン）、アハリ・アラブ病院（パレスチナ・ガザ地区）、ジョセフ記念教育基金（スリランカ）]

◎関キャンパスは「総務課」、各務原キャンパスは「事務室」にクリスマス献金箱を設置しています。ご協力をよろしくお願いいたします。



2025年度 クリスマス礼拝

「イエスさまはあなたとともに」

日本基督教団東海教会 牧師 和田 芳子 先生

日 時：12月22日(月) 11:00～12:20
(第2時限の講義は行いません。)

会 場：関キャンパス グレースホール

マタイによる福音書 1章 18節～2章 12節

先日、美術館に行ったところ、ルカ・ジョルダノという画家の「マギの礼拝」という絵を見つけました。ルカ・ジョルダノは、17世紀に活躍したイタリアの画家です。「マギ」というのは、日本語(新共同訳)では「占星術の学者」と訳されていることばです。その題名のとおり、占星術の学者たちが、赤ちゃんのイエスさまに宝物をささげているところを描いた絵でした。

占星術の学者たちは、東の方で「ユダヤ人の王が生れる」ということを知らせる星を見つけ、ユダヤ人の王を探しにエルサレムに来ます。そしてイエスさまにお会いすることができ、黄金、乳香、没薬の三つの宝物をささげます。

この内容から、よく思い浮かべるのはこんな情景です。

ユダヤの国の東の方にあったペルシャの国の人らしく、ターバンを頭にまいた3人の人がらくだの背に乗って、遙か上の方に輝く大きな星を目指して真っ暗ななか砂漠を歩きます。そして、ベツレヘムで赤ちゃんのイエスさまを抱いた母マリアとヨセフを見つけます。3人それぞれが黄金、乳香、没薬をイエスさまにささげます。そこには合計6人しかいません。

ところがルカ・ジョルダノの描いた「マギの礼拝」という絵では、人がたくさんいたのです。明るいところで顔がよくわかる人たち、絵の奥の方でうっすらといるなとわかる感じの人たち、合わせて50人くらいです。馬も、犬もいるのです。その人たちすべてが赤ちゃんのイエスさまを見ています。え、占星術の学者たちがイエスさまのところに来たときって、こんなににぎやかだったの？占星術の学者だけでなく一緒にたくさんの人が来ていたの？と、思ってもみなかった光景をまのあたりにしました。

それで、ヨセフに天使が現れたときのことを思い浮かべてみました。ヨセフは婚約していたマリアに聖霊によって赤ちゃんができ、自分の子どもではないからマリアと縁を切ろうと決心しました。そうしたら主の天使が夢に現れて、「マリアを迎え入れなさい。」と言います。この言った天使は一人だけけれど、その周りにたくさんの天使たちがいて、ヨセフを取り囲み、ヨセフはその天使たちに圧倒されたのではないかと。

聖書の言葉は、読む人ひとりひとりに語り掛けています。あなたご自身の想像を膨らませて、「インマヌエル・神は我々と共におられる」方であるイエスさまをお迎えしてください。そのときどきのあなたにぴったりの方として、イエスさまはいらっしゃいます。

◆プロフィール

大学で社会福祉を学んでいるとき、大学の先輩に誘われて教会に行き、教会学校の子どもたちと遊んだり、聖書を学んだりするなかで神さまへと導かれました。

大学卒業後、公務員として障がい者施設、児童相談所、婦人相談所など福祉の現場で働きました。そのなかで、人が生きていくことを支えるのは、社会的な支援と共に、いつも見守ってくださる神さまと、いつもともにいてくださるイエスさまだと実感し、そのことを伝えたいと牧師になりました。2019年4月から名古屋市にある日本基督教団東海教会の牧師をしています。それとともに、幼稚園で子どもたちに神さまのことを伝えたり、名古屋市内にある子ども、女性を支援している団体などに関わり、教会の外でもいろいろな方々と出会うことを楽しんでいます。